

◆伊藤洋二 選

～会報平成二十七年十月、十一月号より～

行き止り日本海の秋没日

細川寛子

「のと里山海道」の千里浜付近の夕日でしょうか。選者は和倉温泉への途中で日本海へ沈む「だるま夕日」を目撃したのです。そして能登半島を周遊し北緯三七度二五分三一・六秒の「白米千枚田」は「まさしく絶景」でした。海の向こうは見えません、瀬戸内育ちの私は不覚にも涙ぐんでいました。良き思い出を俳句で頂き「心の写真」と致します。有難うございました。

胸ボタン一個はずして秋の風

中井 勇

年を取るにつれて手先の器用さが鈍り、特にワイシャツのボタンには何時も閉口です。作者は選者と同年配かと拝察致しますが心境一致です。俳句は「心の手鏡」、胸襟を開くにはぴったりの文芸と考えます。毎月の投句で脳みそを掻き混ぜ、難開の釦にも挑戦し続けます。激励の一句に感謝です。

小さな秋に向かって深呼吸する

秋月裕子

唱歌「ちいさい秋みつけた」を彷彿とさせ、薄れゆく童心が久しぶりで蘇りました。オルガンを弾いて下さった「女先生」の指先が鍵盤を舞う光景は、「即時再生」可能です。「わずかなすきから秋の風」サトウハチロー先生作詞・中田喜直先生作曲、それでは「色々な秋」を深呼吸します。優しい先生を思い出す懐かしい一句です。

良い顔と思へぬ踊り上手かな

越前春生

輪島市で「御陣乗太鼓」を鑑賞致しました。樹の皮で仮面を作り、海藻を頭髮とし、太鼓を打ち鳴らしながら、能登キリコを背に受けての熱演でした。夜叉面、女幽霊面、男幽霊面、爺面、達磨、の形相は「畏敬の念」の一言です。お面を外された保存会の青年は「イケメン」でした。感動を呼び覚ます一句です。

老眼の我に七重の月がでる

小泉花子

選者の老眼鏡は二つ、食事用と読み書き用です。正しくは部屋ごとの設置です。

お陰様で遠くがよく見え、朝な夕な霊峰石鎚山と立ち話をしています。老化現象は「赤ちゃんに帰る」とか。涙の湧水量が増えており、新聞の記事にメガネが曇った夕餉後の事でした。涙目でのお月様は虹の中でした。まさに感銘の一句です。

手を振れば手を振る私の影法師

鈴木和枝

明瞭な自分の影を最近見ていません。そうなんです。影が薄いのです。頷かないで下さい。それも一因ですが部屋の照明灯では自分の影を意識しませんね。さあ「お天道様」のご機嫌の良い日、特に夕方がお勧めです。影は我が生霊とか。背筋を伸ばし右手を振れば左の手が答えてくれますよ。動画にUPの一句です。

肩の荷を下ろして停まり赤とんぼ

山下正純

久しく荷を肩にする事はありませんが、選者の地方のお祭りで、「だんじり」と云ふ奉納屋台を、太鼓と鉦のお囃子で伊勢音頭にのせて黄金波打つ街道を担ぎます。燧灘(ひうちなだ)の夕映えを背に受け、赤とんぼが屋台の欄干に停まっています。神輿を見送り屋台は各町内へ、明日から始まる「祭り暦」を捲ります。心浮き浮きの一句です。

おっさんと席譲らるる生身魂

吉原瑞雲

「生身魂」を「おっさん」と愛称するセンスに脱帽です。選者も山手線でお声を頂き、本人は時期尚早と自負しておりましたが、人様のお心遣いは「心の栄養剤」と座らせて頂きました。都会のお方は空気を読むタイミングがお見事で素直に感謝です。生身魂には程遠く暫くは「なまみたま」かと…。年配者に嬉しい一句です。

◆三橋百笑 選 ～朝日新聞の俳壇・歌壇より～

すぐ集ふ昭和の与太の芋煮会

伊藤 舞

あ～いいな～。私も与太に入りたい。なごみたい。

従業員これで全員朝焚火

あらゐひとし

栃木県の壬生市とあります。朝の焚火を囲む従業員の一人として加わりたいな。パチパチ音を立てる薪、きっと笑顔の温かい雰囲気が溢れていそう。

掃かないで下さい朝の落葉道

藤掛博子

共感です。散り敷く落葉をガソソガソソ踏んで行く。黄金のひと時。頭、心がスカッとしたり、時には詩も生まれるというのにね。

気に食はぬ娘の彼の赤マフラー

片山正寛

「ぼっちゃん」の赤シャツじゃないが、気に食はぬ、に同感ですぞ。

君からの返信メール本当は最初に見付けて最後に読む

森越裕里

青春ですね。ああ、あの頃一週間に十通もラブレターを書いていた私。そのお相手は同居中です。

君もついに六十八か引退かと世間騒ぐぞ頑張れ〈憲法〉大健雄志郎

選者曰く、「友人の励ましと思って読んでいくと、相手は日本国憲法」とありました。実に見事な工夫、うまいですね。